

滋賀県立陶芸の森のあり方に関する懇話会第3回会議 議事概要

1 日 時 令和6年5月 28 日(火)9:30~12:00

2 場 所 滋賀県危機管理センター1階 災害対策室4

3 出席委員 辻田委員、洲鎌委員、山崎委員、玉置委員、近藤委員、松井委員

4 議題

(1) 滋賀県立陶芸の森の事業等について

(2) その他

5 会議概要 以下のとおり

委 員	(1) 滋賀県立陶芸の森の事業等について 【つちっこプログラムについて】 つちっこプログラムの取組自体の完成度は非常に高い。問題は取組の内容が外部から見えないことであり、これはアーティスト・イン・レジデンス(以下、「AIR」という。)にも共通する課題である。例えば、子どもたちの作品を産業展示館のスペースで展示する等が考えられる。
座 長	資料 1 の検討課題に挙がっている、講師数や産業振興との関係について意見をいただきたい。
委 員	つちっこプログラムの取組は子どもの人材育成の取組として上手くされていると思う。資料 1 に掲載されている先生からの声には、製作費を下げしてほしいといった声や県の補助金を活用できなかったことを残念に思われる声もあるようだが、現在の製作費の状況や補助金の内容について教えてほしい。
陶芸の森	通常の講座運営としては、学校に費用を負担していただき、これにより講師への謝金や粘土代、焼成費等を賄っている。特に卒業制作等の通常よりも手の込んだ作品制作を行う講座は、その分、学校負担の費用も増加することになり、学校からの費用を下げしてほしい、という声はこのことに起因するものと考えられる。守山市では講師への謝金分は市の教育委員会が負担する等、学校や家庭の負担が少なくなる取組を行っている。補助金についてだが、これは昨年度に県が実施した

	<p>次世代育成を目的とする補助金のことで、つちっこプログラムは補助対象となっていなかった。</p>
陶芸の森	<p>受講者数などの状況によっては赤字になることもある。製作費を下げしてほしいという声があるところではあるが、むしろ、値上げをしないと事業運営が難しいというのが実態。</p>
委員	<p>費用負担の問題は学校側にとっても運営側にとっても難しい問題である。京都府は次世代育成の取組に対して一定の費用負担を行っているところであり、つちっこプログラムを継続していく意向があるならば、滋賀県や甲賀市も何らかの対策を講じる必要がある。</p>
座長	<p>県の補助金の仕組を教えてください。</p>
事務局	<p>昨年度、次世代育成の観点から小学生を対象に、県内の地場産業や伝統的工芸品に関連する体験事業を実施する製造事業者に対する補助金事業を実施していた。この補助金は次世代育成に寄与するとともに製造事業者も支援するものであり、つちっこプログラムを運営する陶芸の森や世界にひとつの宝物づくり実行委員会は製造事業者でないことや、陶芸の森には指定管理料を、世界にひとつの宝物づくり実行委員会にはつちっこプログラム運営のための負担金を交付していることから、つちっこプログラムについては補助対象外としたもの。</p>
座長	<p>甲賀市は何らかの支援を行っているのか。</p>
委員	<p>一昨年から甲賀市からも支援を行っている。今後の陶芸の森の継続性や地場産業の振興も視野に入れ、県も市も支援を行っていく、というスタンスを明確にする必要があると感じる。</p>
委員	<p>つちっこプログラムは信楽焼に関する子ども向けの体験事業として完成された取組であると感じる。参加者数に応じて資金援助をする等、資金援助の仕組については制度的見直しを行っていただきたい。</p>
委員	<p>今の議論を聞いていて、次のようなことを感じた。現在の社会的風潮として、公共施設の運営には民間の活力を取り入れて、そこから事業資金を獲得していくべき、という考え方があるが、これは本当に正し</p>

	<p>いことなのだろうか」と疑問を感じる。これを継続しては、民間の事業活動から生まれる税収を基に行政サービスが実施される、という本来の仕組が損なわれていくのではないかと感じる。つちっこプログラムで言えば、次代を担う子どもたちに何を体験させるべきか、そのためにはどの程度の費用が必要であるかを明確にし、その取組が収益を生むものでなかったとしても必要な取組である、ということを経済部局に説明し、財源を確保していく必要があると考える。</p>
座長	<p>行政には資金の問題について、教育という視点を踏まえて検討していただきたい。講師数や講座実施のためのスペースについて、試験場や産業展示館を活用していくことの見通しや可能性について話を伺いたい。</p>
事務局	<p>試験場の研修生が子どもたちに陶芸を教えることで、研修生自身の技術向上につながると考えており、現在も、つちっこプログラムの特別講座として、試験場で子どもたちにろくろ体験をしてもらったり、信楽焼の魅力を伝えたりしている。今後も連携の幅は広げていきたい。</p>
委員	<p>現在も産業展示館の一角をつちっこプログラムの実施スペースとして活用いただいている。前回懇話会でも指摘があったとおり、産業展示館自体が機能的にも場所的にも今のままでよいのか、という問題があり、私個人としては抜本的な見直しが必要と考えている。子どもに焼き物の魅力を伝え、その子が未来の後継者となる、という流れを絶やさないよう、今後について考えていきたい。</p>
座長	<p>人材育成に占める役割等、つちっこプログラムの必要性は大きい。積極的な情報発信や財源の問題等について、県等に検討していただき、このプログラムの強化に各関係主体も協力していただきたい。</p>
委員	<p>子どもを指導するのは若手陶芸家であり、彼らは子どもに教えることを通して自らの技術を磨くことにもなる。つまり、つちっこプログラムは若手陶芸家の定着や人材育成にも一役買っている。子どもの人材育成のための財源確保、という考え方だけでは不十分であると考え</p>
座長	<p>若手人材育成という観点からの財源確保という考え方もあり得る、</p>

<p>委 員</p>	<p>ということで了解した。</p> <p>【AIRについて】</p> <p>海外にも AIR の取組を行う施設は増えてきており、そういった国外の取組のリサーチの必要性を感じる。特に中国やインドは活発で、それらと比べると陶芸の森の AIR 事業は世界的な基準に達していないように感じる。例えば、国外では、作家が製作した作品を販売するルートを確認しているところもある。宿泊棟については、他の AIR 施設と比べて、陶芸の森の宿泊棟の老朽化がひどい、という噂が出回ることを危惧している。</p>
<p>委 員</p>	<p>施設や設備の刷新は必要と考える。作家にとっては設備のほうが重要かもしれない。情報発信については、信楽でイベントが開催される等、人が集まるタイミングで滞在作家の作品を産業展示館で展示したり、販売を行ったりすることで、世界中から人が来ているという AIR 事業の広報になる。他にも、AIR の枠組みの中で海外や大学等と連携し、単に作品制作をするだけではない、様々なプログラムをすることもできるのではないか。</p>
<p>委 員</p>	<p>AIR の事業継続を念頭に置くのであれば、施設の老朽化への対応は必須と考える。世界レベルに合わせていく必要がある。視点が変わるが、予算をかけすぎない範囲で、現在と過去の滞在作家に陶芸の森のレジデンスで何を発見したか等をインタビューする動画を作成し、それをアーカイブ化し、県民に紹介していくことで陶芸の森の AIR 事業の魅力を伝えることができるのではないか。</p>
<p>陶芸の森</p>	<p>委員の意見を伺い、過去の滞在者の同窓会的な場を設け、それをアーカイブ化することで情報発信のためのコンテンツを整理していくことは大切と感じた。現在も、AIR 事業を立ち上げたい、という国外の方々から陶芸の森に視察にやって来られたり、国外からの協定を結びたいという申出をいただくことがある。このようにプロや専門家からは評価をいただいているが、県民等の近い方には魅力を知ってもらえていない。そういった方々へのアプローチという点において、委員の意見はありがたい。</p>
<p>座 長</p>	<p>世界レベルの AIR 施設を目指すうえで、財源はどのように考えるか。県からの負担や国からの予算獲得は考えられるのか。</p>

事務局	<p>県として投資する際には、長期的な見通しや過去の実績を踏まえて、その事業の意義を説明する必要がある。そのために、過去の AIR 事業の実績等を整理し、これまでの成果や事業の意義を発信することには大変、有用と考える。そのうえで、事業のために必要な財源については事務方で検討することになる。</p>
委員	<p>過去の滞在作家の資料を掘り起こし、一定のクオリティの映像を制作し、アーカイブ化していくには費用だけでなく、専門の部署を設ける等、人的コストも必要と考える。</p>
委員	<p>データの蓄積だけでなく、その保持にも大きな費用が掛かる。アーカイブ化を行うのであれば、それなりの覚悟を持って取り組む必要がある。</p>
委員	<p>AIR が国内で比類のない取り組みであるという皆さんの意見を伺い、AIR 事業には県や市レベルでなく、国家としてやっていくべき事業だと、関係者が国に訴えていく程の心構えが必要であると感じた。</p>
委員	<p>陶芸の森の AIR 事業は信楽の誇りともいえる。陶芸の森の外で展示をされた方は印象に残っているが、陶芸の森の中でのみ活動される滞在作家の方々の情報は一県民からすると伺い知れないのが現状。ぜひ、市も県も国も AIR の魅力発信に取り組んでほしい。</p>
座長	<p>地域の人と滞在作家が協働で作品制作を行う取組等はされているか。</p>
陶芸の森	<p>去年から「穴窯プロジェクト」と題して、滞在作家と試験場研修生の方々、工業組合の青年部の方々が3泊4日で穴窯を焚き、出来上がった作品を駅前の伝統産業会館で展示するという取組を実施しており、非常に好評であったため、今年も実施する予定。この他にも、滞在作家の方々と地元の方々が交流を深められるような取組を実施していきたい。</p>
委員	<p>私が滞在作家であった時には、陶芸の森に地元の職人を紹介してもらい、その方と協働して作品制作を行った。その職人の方を通して信楽の魅力を知ることができた。滞在作家が地域の方々と関係性を</p>

	構築できるよう、取り組んでいく必要があると考える。
座長	そういったことを望まれる滞在作家の方々はいらっしゃるのか。
陶芸の森	実際に希望される作家もいらっしゃるし、希望があればアテンドするようにしている。現在、地域との交流や地域活性化につながる作家の方を優先的に受け入れる、ということを検討しており、より地元の方々との交流ができるようにしていきたいと考えている。
座長	ここまでの議論で陶芸の森の AIR 事業について、国から地域まで幅広く巻き込んだ事業展開を目指す、という方向性が示された。県にも前向きに取り組んでほしい。
委員	国外の AIR 施設の多くは国絡みであり、対等な交流が難しいと感じるときがある。事業の位置づけをしっかりと考える必要性を感じる。
座長	【試験場との連携について】 試験場との連携に関するこれまでの展開や課題について共有いただきたい。
事務局	コトづくりということで、モノだけではなく、製品が出来上がるまでのストーリーが大事である。学芸員の方の目利き力と製品情報をもとに試験場収蔵品を復刻させる。科学的な分析は試験場、製品情報は陶芸の森の学芸員、これらの魅力を地元事業者の方に紹介することで信楽焼の良さを再確認し、製品開発事業に繋げてもらう、という勉強会を実施している。また、試験場に数多く配備されているデジタル機器を陶芸の森の企画展等で活用いただいている。
委員	つちっこプログラムや AIR 等の様々な事業を陶芸の森という一カ所で実施するのではなく、様々な主体が連携してより良いものを作ることが大切であると感じる。コーディネーター的な人材を置き、より良い連携を模索することが一つの目指すべき形と考える。
委員	試験場や陶芸の森の魅力的な取組や貴重な作品の良さを発信していくための連携事業を実施していくにはコーディネーター的な存在が必要である。

委員	<p>関西における陶芸というものに対して、試験場は技術面からバックアップをしてこられた、という経緯がある。その取組の良さを陶芸の森と連携してうまく発信していく、ということができていければ両者は良い関係だと言える。</p>
委員	<p>以前、旧試験場の収蔵品の収納場所が新試験場にはない、という話を聞いていたが、今はどうされているのか。</p>
事務局	<p>今は甲賀市産業展示館や信楽高校の教室に置かせてもらっている。収蔵品については可能な限り活用し、見てもらうことが大事。人の目に触れさせられるよう、試験場の展示ホールにて展示し、少しずつ入れ替えながら見てもらえるようにしている。望むならば、甲賀市産業展示館にて常設展示ができればと思う。</p>
委員	<p>展示についても試験場と陶芸の森とが補完しあいながら行っていければと思う。</p>
委員	<p>試験場には貴重な史料が残されている。そういったものを、デジタル機器を活用して復元し、販売していくという取組は信楽の産業にも寄与するものである。そして、販売を行う際の作品の概要説明については陶芸の森が協力し、うまく魅力発信していくという連携が考えられる。</p>
座長	<p>【公園の魅力向上・駐車場の有料化について】 現在の陶芸の森の公園機能について説明いただきたい。</p>
委員	<p>公園スペースには滞在作家が寄贈した作品が展示されているが、それらも朽ちつつあるため、今後は作品の大規模な入替が必要であると考えますが、どうせならば、展示導線をきちんと設計しないといけないと思う。訪れた人が公園をめぐることで陶芸の可能性を感じ、更には町中の窯元散策路にも行ってみたい、と感じてもらえるフィールドミュージアム的な空間を作りたい。また、大塚オーミ陶業の持つ陶板技術や徳島の美術館の存在は広く知られているところであり、大塚オーミ陶業と連携して、陶芸の森内に「陶板の森」を作れば、観光にも役立つと考える。</p>

委員	公園魅力化のための財源確保は課題。行政は、県民全員で協力して公共空間を良くしていこう、という意気込みをことあるごとに県民に伝えていくべきであり、公共空間の整備のために税金を使うことに対して誰もが賛同するというような社会のあり方を目指していくべきと考える。
座長	地元の事業者に対して、利益を寄付のような形で地域振興に役立ててもらうことを求めていくことは難しいだろうか。
委員	地元事業者の方々は信楽に誇りをお持ちであることから、少額であれば受けてもらえるだろうと思う。駐車場の有料化についてだが、平日はともかくとして、休日や人が集まる時期については検討すべきと考える。
委員	陶芸の森の公園スペースを訪れた人が陶芸家の作品を見て歩いて、続けて信楽の町中にも足を運びたいくなるよう、町全体を公園仕立てにし、歩きたいくなるような町づくりをしていければと思う。そのためには市の役割も重要であると認識している。
座長	先ほど、委員からも話のあった大塚オーミ陶業との連携のように、個別企業と協働するという点について、特段、問題はないか。
委員	大塚オーミ陶業は信楽で起業された事業者であり、連携は不可能ではないと思う。
委員	陶芸の森を訪れて一番印象に残るのは公園スペース。それくらい印象深い空間である。人は非日常や異空間に安らぎを感じるものであり、そういう意味で公園は重要だと思う。しかし、駐車場を有料化してしまうと、気軽に公園スペースを利用できるという良さが失われてしまいかねない。施設全体ではなく、施設の一部についてネーミングライツを活用するというのはどうだろうか。野外展示について、プログラムし直すというのには賛成だが、作品をどのように保持していくか、劣化してきたときにどう対応するか、といった視点も踏まえて検討すべきと考える。
陶芸の森	現状を申し上げますと、県内からだけでなく、県外からも多数の来園

	<p>者の方に公園広場は利用いただいている。野外作品の展示や委員の発言にもあったように大塚オーミ陶業の陶板の設置も魅力的ではあるが、そのメンテナンス費用や陶板作品の収集のための費用の問題等、実現までの課題は多い。駐車場の有料化については、地元甲賀市との調整が重要であるが、有料化することにより一般の方々にとって公園利用の妨げになってしまうことや、導入にあたり、精算機の設置にかかる費用負担等の問題を考慮すると、駐車料金を徴収することが妥当であるのか疑問に感じる。</p>
座長	<p>甲賀市の駐車場の現況を伺いたい。</p>
委員	<p>信楽町内の公共施設で有料の駐車場はない。駐車場の有料化については数年前から渋滞対策の意味も込めて導入してはどうか、と議会でも話が挙がっている。しかし、個人的には収入よりも駐車料金徴収に係る費用の方が大きいのではと思っている。大規模なイベント実施時に限って、人力の料金徴収という形態で試験的に有料化を行ってみてもよいかもしれないが、多大な費用をつぎ込んで実施するべきものとは思わない。</p>
委員	<p>まったく同意見である。</p>
陶芸の森	<p>全国に存在する陶芸の森の類似施設において、駐車料金を徴収している施設は極めて少ないと認識している。そういったことから有料化には慎重にならざるを得ない。しかし、現状の駐車場利用の問題として、近隣施設への来訪を目的とした観光バスが陶芸の森の駐車場を利用されるケースがある。こういった大型バスなどの場合に限り、駐車料金を徴収する、ということはある程度あり得るのかもしれない。</p>
座長	<p>駐車場の有料化について、様々な意見を頂戴できた。県には駐車場有料化導入に関する検討の際の参考にしていただきたい。ネーミングライツについてはどうか。滋賀県で実績はあるか。</p>
陶芸の森	<p>県立施設において実績は何件かあるが、公園についてはほとんどない。募集しても応募があるかわからない。</p>

座長	<p>【人材育成について】</p> <p>人材育成といっても将来の担い手育成やコーディネーター人材の育成等様々あるが、どのように考えるか。</p>
委員	<p>試験場と陶芸の森との連携をコーディネートしてくれる人材やプロデュースする人材は必要である。そしてそういった人材の育成を視野に入れて、高校や大学と連携した人材育成の事業が必要であると考え。特に、高校や大学においては卒業生が陶芸の森へ就職される、ということも想定されるため、人材確保という点で、教育機関との連携は非常に重要であると考え。また、県庁職員の方で陶芸の森に来たことがない人が多いように思う。新人研修時に陶芸の森に来るということがあってもよいのではないか。</p>
委員	<p>将来の人材確保を意識した若者との接触は重要。例えば、ボランティアチームを作り、そこに若い世代も参加できる仕組みを作り、そこから将来の働き手が生まれるという流れができていければよい。そして、そのボランティアチームを先導する人材もチームの中から輩出されていけるとなるとよい。また、陶芸の森で企画展や事業に取り組む際、外部の専門家にキュレーターやファシリテーターという形で参画してもらい、これまでにはなかった展示の魅せ方や事業展開を学んでいく体制を構築することも重要である。</p>
座長	<p>現状、地域の方のボランティアチームというのは存在するのか。</p>
委員	<p>委員の仰られたような意味での団体はない。複数の窯元で連携されているところもあるが、人材育成に結びつくものではないように思う。</p>
座長	<p>委員の提案にあったチーム作りはどういったプロセスで可能になるか。</p>
委員	<p>産業だけでなく、文化芸術という広い視点で考えるならば、市だけでなく、県も交えて検討する必要があると思うが。</p>
委員	<p>かえって、県にも市にも属さない存在が主導してチーム作りに動いていく方が望ましいのかもしれない。</p>

座長	コーディネーターが必要というのは意見が一致したところ。そのために地域で自立して活動できるようなチーム作りが必要ということだと思う。
委員	以前の「まちなか芸術祭」の時に滋賀県立大学の学生を含めたボランティアチームが結成された。このチームの構成員の中にはその後も信楽に残り続けた方もいる。彼らはボランティアチームとして活動する中で信楽の良さを感じていて、これが信楽に残る、という結果に結びついたものと思う。このようにイベント開催時に外部の人材を交えてチーム作りを行う取組や予算が重要である。
座長	県はどのように考えるか。
事務局	ここまでの議論で「連携」がキーワードの一つであり、陶芸の森と地域のそれぞれが実施すべきことを明確にし、連携していく必要があること、そしてその間を取り持つ人材が必要であることを認識した。この取組を進めていく中で必要な財源について考えていきたい。
委員	甲賀市は金銭的な意味でも場所的な意味でも人材育成に取り組んでこられたように思うが、今後重要なことは、県と市が人材育成に果たすべき役割の棲み分けであると感じる。
委員	ここまででご指摘のあった、地域内で町おこしのための人材が生まれていく仕組づくりについては市も取り組んでいく必要があると認識したところ。
委員	信楽高校で将来の信楽に残る人材を育成する取組が行われているところではあるが、教育課程で、焼き物がどのように販売され、誰が購入しているのか、という流通の実態について高校生に教えられているのだろうかという疑問を感じる。将来像のイメージを子どもたちに提供していくことは重要と考える。
委員	「中学生カンパニー」といって、中学生に焼き物製品を制作してもらい、パッケージをして地元のセブンイレブンで販売してもらおう、という作ることや売れることの喜びを体感してもらおうプログラムを市の取組として行っている。こういった取組が広がれば自分の将来像がイメージで

<p>陶芸の森</p> <p>座長</p> <p>委員</p> <p>座長</p>	<p>きて、産業の担い手育成につながると思う。楽しみがなければ続かない。</p> <p>セブンイレブンの関係者からは「中学生カンパニー」の取組に対して肯定的な意見を伺っており、もう少し広がりがあってもよいのかもしれない。</p> <p>「中学生カンパニー」の取組で言うと、高校生や大学生も対象にして、国外で商品の販売を行ってもらおう試みも想定される場所。</p> <p>陶芸の森に来られている滞在作家と学生が密に交流できればと思う。そして、こういった取組にもコーディネーターの存在が有効なのではないかと考える。</p> <p>今回の議論はここまでとする。次回はこれまでの議論を振り返りつつ、議論を深めていければと思う。</p>
<p>事務局</p> <p>事務局</p>	<p>(2) その他</p> <p>第4回目の懇話会については日程が決まり次第、改めてご連絡させていただきます。</p> <p>本日の議論から、今の取組自体は良いものではあるものの、それが可視化されていなかったり、強みを活かしきれていないことが課題であると認識した。様々な取り組みが必要であるが、一方で財政的な制約もある。皆様からいただいた案を基に、外部に陶芸の森の魅力を見せていくための方策を検討したい。また、設立から 30 年以上が経過し、信楽の地元振興に関わる主体にも変容があった。次回以降の懇話会では、様々な取組について、陶芸の森が主となって取り組んでいくのがいいのか、各主体が連携していくのがいいのかというのはあるが、ご意見を頂戴していきたい。</p>